

QOL問題における当事者と支援者の関係性について

新潟医療福祉大学言語聴覚学科・栗崎由貴子
新潟医療福祉大学看護学科・金谷光子

【背景】

大森によれば「自分以外の人を経験を共有することは不可能だ」という事実は人間関係の鉄則だという。自己の経験は知覚的に反省 (reflection) 可能だが、他者の経験は自己にとっては思考的な意味しか為しえない。自己と他者が別個独立した存在である限り、他人の経験を自分も全く同じように経験するということは論理的に矛盾である。これを大森は「論理的孤独」あるいは「鉄壁の孤独」とよび、他者問題の解決し難い点として指摘している¹⁾。

しかし、医療・福祉の現場において、対象者の Quality of Life (以下、QOL) の理念に関わる種々の専門職は、時に「論理的孤独」をも超えることを求められる。だが、病を負った当事者が抱える様々な体験や課題を、支援する側がその当事者同様に把握することなど可能なのであろうか。そこで、本発表では、新潟医療福祉大学の教育理念である「QOL サポーターの育成」を基盤として、医療・福祉の領域 (以下、臨床) における当事者と支援者との関係性について論じる。

【方法】

臨床における自己と他者の関係を文献的に考察した。なお発表では、臨床に関わる各職業の特性および当事者の抱える病の種類や重症度への配慮を留保し、専門的立場に関わるもの (専門職) と関わる対象者との関係を純粹に問い直すものとする。また、一般的に患者あるいは対象者と呼ばれる者を「当事者」、専門職あるいは医療技術職と呼ばれる者を「支援者」と表現する。

【結果】

臨床現場で議論されるQOLは「生命の質・生活の質」と訳され、ここには暗黙知として‘当事者の’が隠されている。そもそも「質」と訳される“Quality”は、ラテン語の「如何に」という疑問詞が抽象名詞化した“qualitas”を語源とする語である。したがって、QOLとは「(当事者の) 生命は如何にあるか」「(当事者の) 生活は如何にあるか」を問うものであり、それらが当事者の現在と未来にとって「どのようにある (べき) か」を問う作業ともいえる。ただし、‘誰の’生命や生活を‘誰が’問うのか、といった態度は当事者と支援者との関係性を方向づける態度へとつながりかねない。ここに当事者と支援者の間を隔てる壁を見て取ることが可能であろう。

支援者を「Life を問う主体」とみなせば、「支援者が当事者の life」を問うことになり、当事者の life は主体 (支援者) にとっての客体となる。ここには「主体→客体」、すなわち「支援者→当事者」といった一方向の支援関係が成立する。

一方、当事者を主体とみなせば、「当事者が当事者の life」を問うことになり、主客未分化が生じてしまう。「当事者の life」を支援者と当事者が共に問い、その life をよりよいもの (quality) として共に希求するためには、支援者と当事者の関係が少なくとも双方向以上の関係である必要がある。

だが、「当事者の life」は支援者にとって他者経験でしかない。しかも、支援者にとっての当事者は、「病を持つ者」として支援者の前に現れるまでは、お互いの人生において何ら接点を持たなかった「他人」であった。にもかかわらず、支援者は当事者の「Life」の「Quality」を共に負わねばならないという緊要の職責を迫られる。ここに臨床が直面する困難さがある。

【考察】

臨床教育では当事者を理解する試みとして、支援者側に当事者の置かれている立場や心境を「想像してみる」ことを求める。しかし、この“他者の思いを推察する”という試みは「類推説」と呼ばれ、あくまでも支援者から当事者への一方向の関係にすぎない。なぜなら、支援者は当事者の身体的損傷や経済的損失を事実として「確認」することはできても、当事者自身の主観的な心のあり様を支援者自身が我がものとしてそのままに「経験」し「共有」することは不可能だからである。QOLを「誰が問うか」という問題は、当事者と支援者が双方の関係を主体と客体に画然と分化したままに、お互いを「一人称の I」と「二人称の you」とで捉えている限りは乗り越えることが困難である。

臨床におけるこれらの問題を解消するために、木村は主体と客体との「円環的な不断のかかわり」の重要性を指摘する²⁾。支援者と当事者がアンビバレントな関係となる危険性を排除し、双方の関わりが首尾一貫性 (Kohärenz) をもった不断の「からみあい」であれば、当事者の課題は支援者自身の「経験」としても体験しうるものになる。円環的關係は支援者をも当事者に変えてしまう。つまり、「当事者と支援者が当事者の主観的あり様も含めた課題」を共に確認したという「事実の共有」は、確認したという事実そのものを共に経験したことを基に、その課題へ共に取り組むこと、そのこと自体を意味のある作業として「共働」することを可能にするのだ。すなわち、円環的關係から生まれる「複数一人称の we」を主語に「当事者の life」を問うのである。

【結論】

临床上におけるQOL問題は、当事者と支援者が「当事者の life」を異なる立場から異なる見方をしていることに端を発しているといえよう。そこで今回、双方の関係を「複数一人称」としてみなし、当事者の課題を「我々の課題」として捉え直すことによってこの問題を克服しうることを提示した。

【文献】

- 1) 大森荘蔵：他者問題に決別。岩波講座現代社会学，他者・関係・コミュニケーション。岩波書店，1995：39-58。
- 2) 木村敏：あいだ。筑摩書房，2005。